チャナッカレ・オンセキズ・マルト大学
教育学部外国語教育学科
日本語教育学科

日本語-トルコ語-日本語 テキスト校正手引き
&
学問的誠実性に基づく人工知能（AI）使用ガイドライン

2023 年、チャナッカレ

本稿は、
ア）チャナッカレ・オンセキズ・マルト大学教育学部外国語教育学部日本語教育学科（以下、「日本語教育学科」と省略）の学生が一定の倫理的及び教育的枠組みの中で校正を要求する際、教員も同じ枠組みで校正行動を実施するために、
イ）教育的・学日的生産（課題、レポート、プレゼンテーション等）プロセスに於いて人工知能（AI）の使用学術的誠実論的原則に基づいて実施できるよう作成されたものである。
本稿は初版であり、継続的な改善を通じて進展してくことを目指す。本稿にての全ての表現はアドバイス程度のものであり、必要に応じて拘束力的なのは関連する法律、規則、条例などである。
このドキュメントに含まれる「テキスト校正」は、英語の文献での「proofreading」の概念に相当するものであり、「文書の文法エラーを修正し、テキストを読みやすくするための記述文を確認する作業」（Tauginiene vd.、2018）を指す。テキスト校正手引きの作成に当たっては、Coventry University Group Proof-reading Guidance 2.0 ver.（2020 年 11 月 11 日）および University of York Guidance on Proofreading and Editing 文書を参考にしている。
なお、人工知能（AI）利用ガイドラインの準備に於いては、ヨーロッパ学術誠実ネットワーク（ENAI）テクノリジー＆学術誠実ワーキンググループのメンバーにより記述された ENAI Recommendations on the ethical use of Artificial Intelligence in Education（Foltýnek vd.、2023）が参考にされた。

CC BY NC

CC Lisans: *Japonca-Türkçe-Japonca Metin Düzeltme Kılavuzu & Yapay Zekanın Akademik Etik Çerçevesinde Kullanımına İlişkin Tavsiye Metni* © 2023 by Dr. Tolga Özşen is licensed under CC BY-NC 4.0

文章校正手引き

大学生活において学生がとりわけ外国語で作成されたテキストを母語話者にチェックしてもらうことはごく多くの人がすることである。これを英語で proof-read と言い、そのチェックをする人を「校正者」（proof-reader）と呼ぶ。学生が自分で作成した文章の効率を上げ、よりクオリティーのあるものにしたいことはいいことである。しかし、その「チェック行為」が一定の法的及び倫理的基準と枠組みを守るべきでもある。文章校正プロセスにおいて重要なのは、テキストのオリジナリティが維持され、学生が作成した内容が変更されないようにすることである。校正者は誤りや不足を指摘する責任があり、これらの指摘を基に校正並びに編集作業は学生が行う責任がある。文章校正於ける校正者の基本的な理解は「誤りや不足を指摘すること」であるべく、学生たちは「指摘された誤りや不足を自分の能力内で修正してテキストをより強化する」ことを意識すべきである。

文章校正に関する教員役割定義

a) 教育カリキュラム内関連活動（課題、試験、レポートなど）
b) 事前に定義された課外活動（スピーチコンテスト原稿、エッセイコンテストなど）
c) 学科代表で参加イベント用のテキスト（プレゼンテーション、スピーチ、紹介など）
d) これらに該当しないテキスト（日本の奨学金申請書、CV など）は、学生の要望につづきと最終的には学科（関連する教員）の承認が得られた場合にのみ受け付けられる。

概念定義

2.1. 校正者と評価者の違い: 校正者は文章をより読みやすくする一方で、評価者はそのテキストの学術的な質と量を既存の基準に基づいて評価する者である。
2.2. 校正（proof-reading）と編集(editing)の違い: 校正を行う者は、単に誤りを指摘する責任しかなく、修正すべきではない。「校正」（proof-reading）と「編集」（editing）は異なる概念であり、校正者は直接的な修正を行わず、適切な文法などの使用に指示できる。

テキスト校正で受け入れ可能な倫理的枠組み:

a) 単語や漢字の使用に関する間違いが指摘できる。
b) 句読点、打ち間違い、書き間違い、漢字打ち間違い、略語、引用、番号付け、参照文献、表、図、脚注、および付録の形式的な修正ができる。

c) 文法の誤り、意味のズレ、一般的な流れの問題が指摘できる。が、直接修正を行わず、適切な文法の使用に向けて指導する。
d) 学術的記述（論文、レポートなど）の原則と技法（テキスト内の引用など）の一貫性、欠如、および誤りが指摘できる。学生には必要な情報を提供することも可能である。
e) 学術的記述（論文、レポートなど）に使用される表、グラフ、画像などの資料の誤りが指摘できる。正しい使用法に関するデジタルおよび印刷物の情報を学生に提供することも可能ある。

文章校正の際に倫理的な枠組みの違反につながる可能性のある行為:
校正者は、
a) 文や段落、またはテキストの一部を再度書き直してはならない。
b) 既存の流れに関する問題を解決する具体的な解決策を提案してはならない。
c) 学生に相談せずに新しい単語、漢字や表現を追加してはならない。
ç) テキストに新しい主張、文献、ソース、データなどを追加してはならない。
d) テキストに記載されているデータや定義に変更を加えてはならない。
e) 校正者は独自の意見を追加してはならない。
f) 主題の主旨や流れを変更するような追加、削除、言い換えの処理をしてはならない。

その他の注意事項
a) 校正サービスを外部に委託する場合、学生は提出テキストの最終盤に校正者情報を明示的に記述する必要があある。なお、委託先が企業の場合（特定の料金がかかる場合）、組織情報も詳細に提供し、証拠用の資料を（必要に応じて提示できるよう）用意しておくべきである。
b) 学生は、校正要求をした者が本ガイドラインにて記述されている枠組み内で作業していることを確認する必要がある。ここにて強調されている枠組みを逸脱していることが確認された場合、それは「契約不正行為」あるいは「論文代行」(contract cheating)として位置付けられる可能性があある。学生が確信がない場合には、教員に違反行為を避ける方法について相談した方がいい。
c) 文章校正は、テキストを読みやすくし、品質を向上させるために行われる前提作業であり、高得点とは直接関係はないことを強調しておく。

2.5. レポート提出プロセスに於ける注意事項
レポート、宿題などのタスクにおいて文章校正が行われた場合、最終提出時には下記の手順をもとに進む必要がある。

ステップ１：学生はテキストを記述する（生バージョン）。

ステップ２：それを文章校正プロセスにかけ、校正が行われたファイルを所有する（校正バージョン）。
ステップ３：校正中に指摘された点を修正したり、書き換えたりしてテキストの最終版を作成する（改訂版）。
ステップ４：改訂版を提出する。

したがって、提出するファイルには、1)生バージョン、2)校正版、3) 最終的な修正・編集後に学生が評価のために提出した改訂版を含める必要がある。これにより、教員は手元のタスクの校正プロセス（生版 - 校正版 -改訂版）を透明に確認し、その上で評価を行うことができる。

学問的誠実性に基づく日本語学習における人工知能使用ガイドライン

人工知能（AI）をベースとしたアプリケーションは、その情報源や利用プロセス、意図、手法、承認が明示的に示される場合に、教育活動や学術プロセスで受け入れられると見なされる。この文脈において、学生が教育および学術活動で以下の原則に基づいて AI を感度を持って使用することは非常に重要である。適切な通知、告知、指導、または許可なしに教育および学術生産活動（宿題、レポート、エッセイ、プレゼンテーションなど）で AI を使用することは、学術不正行為または疑問のある行為として位置づけられる可能性もあある。宿題などにおいて AI を使用する際には、注意深く教員と連絡取りながら確実なアプローチをとっておいた方がいい。

教育・学術生産活動（宿題、作文、発表、レポートなど）において、学生は担当教員指導に従って AI ツールを利用するべきである。

これらの活動の生産プロセスにおいて：
a) 教員との相談が第一歩となる。
b)教員との相談の後、形式的なサポートを提供するソース/ツールのみを使用するように注意する必要がある（例えば、修正ツール、スペルチェッカーなど）。

AI ツールは学生が自ら設定した範囲内で内容を作成するものであり、共同著者となりことはない。よって、不正行為が発生し、確認された場合は、全ての責任は学生に帰属

する。著者に関する考慮事項についてはCOPE Guidelines for Authorship and AIを確認すればよい。

AI が提供する情報、参考文献、データ、リソースなどが必ずしも正確であるとは限らない。提出するもの（課題、レポート、エッセイ、プレゼンテーションなど）に関するすべての法的および倫理的責任は学生に帰属しする。

AIツールによる校正の場合
a) AIにかけられたテキストのオリジナルバージョン（生のバージョン）
b) AIにかけられたプロンプト（プロンプト）
c) AIがプロンプトに基づいて作成したファイル（校正バージョン）を、改訂版/最終版/提出版の追加ファイルとして提出するべきである。ステップBおよびCの証拠も追加ファイルに（スクリーンショットまたはスクリーンレコーディングとして）入れるべきである。

AI ツールは完全に信頼性のある情報源ではない。情報源として、学生は教員に指示された信頼性のある情報源を使用するべきである。

AI ツールは主に言語モデルである。テキスト生成においては効果的であるように見えるものの、まだ日本語においては完全に能力を持っているとは言えない。学生はこれらの現実を考慮したうえでAIツールを使用した方がよい。
なお、AIツールはテキストの作成において偽造、改竄、盗用（fabrication, falsification, and plagiarism - FFP）などの不正行為を起こす可能性が十分にある。学生は宿題などの執筆においてこれらの不正行為に注意するよう助言する。

まとめると、学生は学術不正の申し立てを避けるために、AI ツールをサポート要素として、倫理的な枠組み内で使用するべきである。